

ミステリ読書案内

2019.12.11 発行元

第11号 伊藤 剛

鮎川哲也 ベスト表

私は日本のミステリのNo.1に鮎川哲也の『黒いトランク』を推している。多くの人にとっては地味な作品に見えるかもしれない。でも、複雑なストーリーの構成力と地道な推理・捜査の積み重ねが素晴らしいと思う。

《鮎川哲也作品のベスト表》

1. 黒いトランク
2. リラ荘殺人事件
3. 鍵孔のない扉
4. 憎悪の化石
5. 人それを情死と呼ぶ
6. 死のある風景
7. 黒い白鳥
8. 砂の城
9. 死者を苔打て
10. 偽りの墳墓
11. ペトロフ事件
12. 戌神は何を見たか
13. 赤い密室 (短)
14. 宛先不明
15. 朱の絶筆
16. 風の証言
17. 新赤毛連盟 (短)
18. 準急ながら
19. 黒い版画 (短)
20. 死びとの座
21. 写楽が見ていた (短)
22. 青い密室 (短)
23. 積木の塔
24. 五つの時計 (短)
25. プラスチックの塔 (短)
26. 翳ある墓標
27. 沈黙の函
28. 太鼓叩きはなぜ笑う (短)
29. 王
30. サムソンの犯罪 (短)
31. 楡の木荘の殺人 (短)
32. 誰の死体か (短)
33. 青いエチュード (短)
34. ブロンズの使者 (短)
35. 材木座の殺人 (短)
36. 貨客船殺人事件 (短)
37. クイーンの色紙 (短)
38. 西南西に進路を取れ (短)
39. ヴィーナスの心臓 (短)

短編集は、出版社によっていろいろな並び方があるが、私のベスト表では立風書房の『鮎川哲也短編推理小説選集』を基本の位置づけにして、それ以外の単行本化された本を加えた形になっている。この表でほとんどの作品は網羅されているのではないだろうか。

長編は傑作揃い!

鮎川哲也は、1919年生まれ、2002年没。戦後の日本の本格派推理小説の中心となった作家。作品数は、長編が21冊と決して多くない。寡作と言ってもいいくらいの数なので、一作一作がそれぞれ丁寧に書かれている。

右の『ベスト表』を見てもらえばわかるが、私が1位に挙げている『黒いトランク』だけではなく、初期の長編は軒並み高レベルの出来である。『リラ荘殺人事件』にしても『鍵孔のない扉』にしても、日本ミステリベスト10に入っておかしくない作品である。

アリバイ崩しと論理性

作家本人も言っているとおり、戦時中の満州にいた当時に、F・W・クロフツの『ボンソン事件』に触発されて、習作の『ペトロフ事件』を書いたようだが(戦後の引き揚げ時に原稿を失ったとのこと)、クロフツの影響が大きいことは間違いない。鮎川の『黒いトランク』とクロフツの名作『樽』との関連性を研究する人もいるくらいの題材なのだ。

列車時刻表を含む緻密なアリバイ崩し、密室が組み込まれた一見不可能犯罪に見える事件の数々。それらを、鬼貫警部が地道に、執拗に追い続け、ひとつずつ解き明かしていく。現在の警察小説とはまったく違う「謎解きの世界」である。

当時の推理小説の流れにも呼応して、社会派的な要素も取り入れた作品もあり、雑誌の連載に合わせた形になっているものもある。基本的には不器用なのだけれども、作品に向かう熱意で幅を広げていった作家とすることができる。

鮎川の力が一番発揮された昭和30年頃、推理小説がそれほど売れた時期でもなく、収入面などではそれほど恵まれなかっただろう。それでも自分の道を求めた「書き手」だったと思う。

短編にも見所がたくさん

当時は、雑誌の全盛期だったので、短編作品も多い。右表には短編集を18冊載せておいた。トリック中心のコチコチの本格物から、トラベルミステリ風、安楽椅子探偵、名作のパロディ……いろいろと見所は多い。初期のころに描いた(中川透名義の)『赤い密室』などが代表作である。

晩年は他の作家の作品発掘・収集にも努め、鮎川哲也編のアンソロジーも何冊か出版した。現在では名前を冠した東京創元社主催の『鮎川哲也賞』まで出来ている。

大切にしてほしい作家だ。主な長編は、文庫本で常に新刊書店の棚に並んでいて、図書館には長編全集・短編選集が並んでいるというのが理想だ。現実はなかなか思い通りにはいかない。若者にも是非読んでほしいのだが…。

立風書房『鮎川哲也長編全集』全6巻…1977年に刊行された全集。長編13編が収められている。今見ると、細かい字がぎっしり埋まっている。当時は、ハードカバー本は高価で、買うのには決心が必要だった。